

三里塚戦記

空港開港阻止闘争「三月要塞戦」編
そこは死が傍らにある、流血の戦場だった

久住純 (著述業・編集者)

ひさずみ・じゅん 元共産同游撃派 七五年明治大学入学

この連載を「新左翼運動クロニクル」と名付けたのは、パルタイ(旧左翼)から分岐した運動がどのように受け継がれ、あるいは断絶したのか。全共闘運動の「六八年論」としてしか語られることがない、その敗北後の年代史を記録したいと思うからだ。その時代に

は六八・六九年(高揚と敗北)をこえる、大衆運動と活動家たちの何がしかの努力があつたはずだ。そしてその時代をみる視点が政治的に粉飾された言辞ではなく、生身の個人の歴史として語られることで、年代記の真実に肉迫できるのだと確信する。したがって「手

記」や「闘争録」「戦記」という記述スタイルが、このテーマには最適なものである。

いずれにしても、全共闘運動以降も連綿とつづいてきた反体制運動の流れを、個人の視点からとらえる以上、前提となるのはなぜ運動がつづけられたのか。われわれがなぜ闘ったのか、テーマはその根拠をさぐることにある。そ



の根拠をさぐることはまた、運動の発展を希望した動機とともに、運動の頹廃の理由を明らかにすることでもある。われわれの世代が体験しなかった全共闘運動は、戦後はじめて公然と、そしてきわめて鮮明に日本社会の価値観に異議を申し立てた。その異議申し立ては、擬制の戦後民主主義と大学の権威に対して、そしてそれにつきしたがう右翼勢力に対してのものだった。そして同時に彼らが拒絶したのは、その大学の権威をポツダム自治会を通じて、左からささえていたパルタイという権威である。

しかるに、パルタイの議会主義路線を批判しつつも、その不肖の子として「革命党の建設」を標榜した新左翼運動は、全共闘運動の敗残のなかで新たな権威として振る舞い、当然であるかのごとく運動シーンに君臨してきた。かれらの新たな「党建設」とは、内部ゲバルトと学内の暴力支配にほかならなかった。わたしもそれになつた成

員のひとりだ。たえまない内ゲバの血にまみれた、七〇年代の青春——。じつさいに、多くの若者たち（二三人以上）が内ゲバに斃れ、学生運動は世の人々の支持をうしなつた。この連載は、それらの反省をなおざりにはしない。あらゆる歴史的記録というものが次世代へのメッセージであるとともに、わたしたちが噛みしめるべき「いま」であることにおいて——。

善悪の彼岸をこえて

それでもわたしたちは、全共闘運動の「残がい」を乗り越えて、その先にあるものを展望しようとしていた。もう革命の成就是お題目以上にはほとんど信じていないのに、三里塚空港粉砕闘争と狭山差別裁判糾弾闘争は捨て置けない。軍事基地が固定化された沖繩の現実も捨て置けない。そこには忘れていた「正義」があった。七〇年代中期から八〇年代にかけての活動家の意識は、これではなかつただろう

反対運動は七七年四月十七日に二万人集会を実現し、政治焦点は滑走路の延長上にある岩山大鉄塔をめぐる攻防となつていった。ところが五月の連休に、岩山大鉄塔が抜き打ち撤去されたのだ。反対同盟戸村一作委員長が「鉄塔を人塔にして、開港を阻止する」とした戦術は、もろくも崩壊したのである。

岩山大鉄塔破壊のとき、わたしは大学のサークル連合の合宿からもどつたばかりで、仲間から「おまえ、やつと来たか」と言われた記憶がある。その意味では、政府・公団は完全にわたしたちの不意をついていたのだ。

鉄塔跡地では旗ざおを構えたまま隊列を組んで、機動隊に迫ろうとすると猛烈な放水を浴びた。お腹にまともに受けた瞬間、身体がふわっと浮くような感じだった。ウィーンというモーターの音がして、暑いと感じられる五月の日ざしのなか、放水のしぶきが肩にはじける。ちよつとシャワーを浴びたような快感と、危険な戦場にいる臨

か。シラケ世代と呼ばれたわれわれが、たとえば「木枯し紋次郎」（七二年）放送開始）に立ち現れる不正義に憤り、紋次郎の義侠心に人間の悲しさと優しさを見る。そして「仁義なき戦い」（七三年）封切）では、任侠界における正義の危うさに愕然としながら、それを当為のものとして受け止めていた。この「正義の不在」こそが、七〇年代のわたしたちの体感であつた。

したがって、三里塚・沖繩・狭山におけるそれが「正義」ではなかつたとしても「善悪の彼岸」（ニーチエ）をこえた何ものか。たとえば自己犠牲のなかに「善悪」を超越した「意志」があるはずだつた、とわたしは思う。三里塚において国家が農民から農地を奪う、目の前に理不尽な現実がある。すべてはそこにあつた。たぶんそれは「怒り」という言葉がふさわしい。

このリレー連載では、すでに国富建治さん（「かけはし」編集委員会）が三里塚闘争の時代背景を解説してくれ

場感。つぎに盾を持った機動隊員が前進してきて、そのまま追い立てられるように道路から排除された。

翌日は朝から千代田農協の構内で、鉄塔撤去に対する抗議集会となつた。と同時に、周辺で機動隊との衝突がはじまつた。集会をしている場内にもガス弾が飛来して、たまたまそれに当たつた労働者が昏倒する。機動隊と旗ざおをかまえて対峙するデモ隊の脇から、突如として走り出てきた赤ヘルが火炎瓶を投擲する。機動隊のジュラルミンの盾が、サーツと後退する。随所で竹槍による機動隊との激闘が繰り広げられる。投石も空を覆うようにすさまじかつた。そんな攻防が昼過ぎまでくり返された。

ガソリンを詰めた瓶の口に、ねじ込んだ布に直接火を点ける。気化したガソリンが、ボウボウと燃えさかる。この直火（ちかび）型の火炎瓶が多く投げられたのは、わたしたちには意外なことだつた。火炎瓶取締罰則が七二年



航空法違反の告知。抗議する戸村一作委員長の姿も

に施行されてから、もう火炎瓶は特別の存在になつていったのだ。ゲリラ的には何度も投げられているが、たとえばソ連大使館に投げたマル青同の活動家が、懲役三年の実刑を受けている。

そんなわけだから、炭酸マグネシウムと硫酸を化合させて発火する、触発性の火炎瓶が準備されていたのだ。直火型にくらべると発火は派手だが、威力は小さいとされていた。しかもビール瓶では重すぎるので、割れやすいキリンレモンの瓶が適当とされていた。ところが、ビールの大瓶に満タンのガソリン火炎瓶が派手に投げられているのではないか。やはり実力闘争は、火が出る華々しい。五月の陽光のもと、華やかな野戦が展開された。

しかしこの戦闘の過程で、臨時野戦病院を警備していた東山薫さんがガス弾の直撃を受けて死亡した。東山さんは非戦闘員である。翌日未明、芝山町町長宅を警備していた機動隊が襲撃され、警官一名が死亡している。犠牲に

なつたのは千葉県警の警察官で、地元では人気のある巡查部長だったという。これも火災瓶による襲撃だった。空港による犠牲者は、東峰十字路の警察官三名、その翌月に「空港をこの地に持つてきた者を憎む」という遺言を残して自殺した三ノ宮文男さん（青年行動隊）をふくめて、六人となった。合掌……。

局地的な革命戦争

開港前のゲリラ闘争は、集会の開催などと関係なく行われていた。夜半に行われるゲリラは、現地では「天狗のしわざ」と呼ばれたものだ。

夜半にトラックで警備の手薄なフェンスに乗り付け、鉄柵に火炎瓶を叩きつける。ポツと燃え上がる炎を背に、

トラックに飛び乗って逃走する。戦果はせいぜい、監視塔を焦がす程度だ。現地集会がひらかれる時以外は、ヘリコプターが動員されるのは稀で、空港の中からパトカーや警備車両が出動することもない。いわば三里塚の闇の様子を、警察無線の傍受で何度も聴いたことがある。

「第五ゲート付近、火炎瓶事件が発生。監視施設が炎上中」「トラックで逃走の模様」「警備出動の可否を上申」などという会話が聴こえてくる。じつさいに警備車両が出動して、某党派の団結小屋を捜索するのを聴いたこともあった。「トラックのエンジンが熱いかどうか、確認せよ。エンジンを確認せよ」という警備本部からの指令で、現場班から「エンジンは……、冷えています」の応答があった。

ゲリラに使った車両を、そのまま団結小屋まで回送する作戦はありえない。その夜のうちに、空港の警備圏外に脱

出しているはずだ。だがそれも、まだNシステムがない時代だからこそ可能だったゲリラであって、九〇年代にはいると物資の搬入も幹線道路を避けなければならなかった。後年、北海道への自転車ツーリングで「元ゲリラ要員」といつしよに利根川サイクリングロードを走ったとき、河川敷の道路経由で物資を搬入したと聞かされたものだ。三里塚現地では「ホーチミン・ルート」や「竹槍街道」という戦術的な地名が使われていた。

警察無線を盗聴してよくわかったのは、現場の最高指揮官が「参事官」ということだった。参事官（本庁課長・警視長クラス）は本庁採用のキャリア組で、派遣された各県警の本部長を歴任したあとに、本庁にもどって警視総監レース（審議官・警視監クラス）に臨む。したがって自分よりも年上の県警幹部を叱咤しまくり「ヘリを飛ばせろ！」と叫ぶ。その下命をうけた県警幹部から現場に「〇〇参事官より、か

さねてヘリ出動の要請あり」などと連絡が入る。「強風のため、現状では無理」「かさねて、ヘリの出動要請あり」「……」そんなやり取りは滑稽で、しかし追真のものだった。

昼日なかにトラックではなく、徒歩で山野を逃げたこともある。もう開港していたから、飛行阻止闘争という意味合いで、滑走路の延長上で黒煙を炊くというものだった。山林火災にはならないよう、古タイヤや灯油をつかった大きな焚火である。黒煙が上がれば、飛行機の離着陸に影響があるだろうというものだが、近くにいたわたしたちが煙たい思いをするだけだったかもしれない。

もうもうと黒煙があがると、機動隊が大挙してそれを消しに来る。そこを待ち伏せして襲撃するというわけではなくて、なにしろ少人数だから逃げる、無許可で大きな焚火をしたただだから、刑事犯罪ではないと思われるが、とにかくゲリラ闘争らしく逃げる。田んぼ

の畔を走り、小川を飛び越えて山林に隠れる。逃走地点は決めてあつて、一時間ほど逃げた地点に迎えるクルマがやつてくる。この場合はクルマをゲリラに使ったわけではないので、そのまま団結小屋にもどって夕食、乾杯ということになるのだった。

チッソ風船に金属片をつけて大空高く放つのは、管制レーダーの攪乱を狙つてのことだが、影響があつたのかどうかはわからない。岩山の周回道路から、離陸するジェット機をめぐけて花火を上げる。これは実際に命中（機体に炸裂）したのもあつたという。

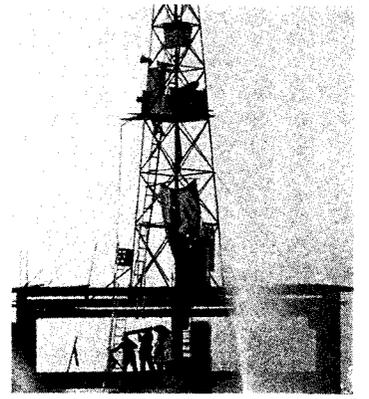
開港阻止の前段階決戦

話を七七年の開港阻止闘争にもどそう。翌年の開港阻止決戦をみすえて、新たな準備が始められていた。

岩山大鉄塔の撤去後、滑走路をにらむ岩山に完熟飛行監視用の岩山要塞が建てられたほか、反対同盟は横堀に闘争拠点構築したのだ。まだ用地取

得も行なわれていない、横風用滑走路の延長に立つ横堀要塞である。第四インターを中心に建設隊が組織され、鉄筋や電気のにわか技術者が調達された。コンクリート打ちは荒つっぽい業者に依頼した。岩山鉄塔のときは山谷の鳥職人が多く参加したというが、業者にしかできない仕事がいはい活動家たちの自前だった。

わたしも番線（はりがね）や結束線（銅線）の巻きかたをおぼえた。モルタルを塗らなければコンクリートが水を通すこと、発電機にはガソリン式と軽油式があるのをはじめて知った。要塞を建てた場所は、三ノ宮さんの畑である。ちょうど野球のグラウンドのような形状で、要塞をバックスクリーンのあるスコアボード棟に見たてるなら、ベンチの位置にある作業小屋で暖をとりながら、中島みゆきの曲を聴いた記憶がある。荒井由実（ユージン）の曲も新鮮な時代だった。四畳半フォークソングに代わり、ニューミュージック



厳寒のなか戦われた二月要塞戦

やディスコサウンドが流行りはじめていた。ピンクレディがラスベガスに進出し、キャンディーズが解散コンサートを後楽園球場で開いたころだ。

そうして完成した横堀要塞は、狙いどおり政治焦点化するのか。向こうがそのまま放置してしまえば、開港阻止決戦の決め手にはならない。おそらくそんな思惑から、七八年の二月に第一次の横堀要塞戦が戦われた。もはや「闘い」ではなく「戦い」という漢字がふさわしかったと思う。敵の出かたや戦術の確認のために行なわれた二月要塞

戦は、厳寒のなかでの戦いだった。まだ要塞の二階と三階は鉄骨のままである。

二月六日、未完成の要塞の最上階部分に、二十メートルの鉄塔が建てられた。滑走路（未完の横風用）の延長に建てられる鉄塔の高さが航空法四十九条に違反するとの警告は受けていたそれが「警告」だけなのか、それとも「戦闘（取り締まり）」の根拠になるのか。事実、千葉県警はすぐには動かなかった。東京と千葉をむすぶ京葉道路に、共労党がレポ（偵察役）を出して、警視庁から重機と機動隊のカマボコ（輸送車）が派遣されたのを現認している。千葉県警は航空法での立件、取り締まりをためらったのである。いずれにしても、サイは投げられたのである。

要塞にたてこもった四十人ほどの支援は、現闘の責任者クラスが多かった。反対同盟からは内田寛一行動隊長、婦人行動隊長の長谷川タケさん、小川むつさん（副行動隊長）、辺田の石井英

るか。などと軽く考えるいつぼう、のつべきにならないことになったなと思っただけだ。

そして反対同盟農民の闘いに呼応する決意を固めては、憶しがちな心を鼓舞する。のちに暴力団取材でヒットマンたちの憶する心境を知って、似たようなものだなと思っただけがある。山守親分（金子信雄）の意を受けてヒットマンとなった「仁義なき戦い」の広野（菅原文太）が、「あとがないんじや」と言いながら売春婦を抱くシーンがある。

女性解放運動の洗礼を受けていた時代、広野のような発想はなかったものの、女性との生活も知らずに死ぬのはイヤだなと思っただけだ。大げさに思われるかもしれないが、戦う以上はひそかに死を覚悟していた。前年には東山薫さんがガス銃の水平撃ちで殺され、機動隊も殉職者を出している。じつさに開港阻止決戦では、事後の自殺をふくめて二人の犠牲者（新山幸男さん、

祐さん、横堀の熱田一さん（のちに熱田派代表）、木の根の小川源さんら六名の幹部である。緒戦から火炎瓶が降りそそぎ、ガソリンの炎に包まれた毛布が落ちてくる。そんな光景がテレビ画面に報じられて興奮したものだ。

わたしは党派の事務所呼び出されて、そのまま労働者が運転するクルマで現地に運ばれた。空港付近に着いたときには、ヘリコプターのサーチライトに照射された要塞の鉄塔が夜空に鮮明に浮き上がっていた。黒い針葉樹林のむこう。真冬の暗い夜空に、そこだけが切り取られたような、明るいステージに見えたものだ。

闘争現場はしかし、悲惨をきわめるものだった。凍てつくような極寒の夜空に、放水と催涙弾が飛びかう。鉄塔上では四人の支援活動家が抵抗をづけていた。要塞を遠くのぞむ「グラウンド」に機動隊と対峙しながら、われわれはジュラルミンの盾と揉み合ういいに何もできないのだ。まる二十四

原勲さん）を出した。ゲート内での乱戦では、拳銃使用による負傷者も出ている。

満を持した三月要塞戦

わたしたちが要塞に入ったのは、三月上旬である。横堀の団結小屋に集合して、そこから水田の畔をたどる。靴を泥濘にとられながら、要塞の裏手の土手を駆けのぼった。要塞に入ったとき、反対同盟の石井新二氏（青年行動隊）から「政府と公団は三月三〇日に開港を祝して、五〇〇人ほど政財界の人間を集めてパーティーを開こうとしていらいらしい。それに一泡吹かしてやろうじゃないか」という目的を告げられた。

そのために、要塞から東と南に抜け穴（トンネル）を掘って脱出路にする。あるいは長期籠城ができるようなら、その穴を補給路にする計画を告げられた。ようするに、要塞に引きつけた機動隊を地下道で翻弄する長期戦を

時間以上もの激闘に耐え、飲まず食わず不眠不休で闘っている要塞戦士たち……。

ビニール袋に入れていたと思われるライターで、火炎瓶に着火して鉄塔下に炎が炸裂したときは驚いたものだ。そのかん、空港のゲートに火炎瓶が投げられた報が届いて、支援のデモ隊から喝采が上がるなど、夜を徹して対峙戦がつづいた。やがて夜が明けて、反対同盟の要請で鉄塔に登っていた戦士たちは投降した。不眠だったわたしたちも団結小屋からのクルマに収容されて、その行程で幻を見た記憶がある。夜明けの風景にあらわれた立木が、怪獣のように見えたのをおぼえている。

三月一日の現地集会は、北総台地特有の赤風が吹きすさぶ中で開かれた。そしてこの時にわたしは、三月要塞戦への参加（徴兵？）を示唆されたのだった。学内での運動に行き詰まりを感じていた矢先のこと、しばらく拘留所にでも行って資本論を本気で読んでみ

視野に入れたもの。逮捕されない戦いをする、というものだ。

てつきり逮捕・投獄覚悟と思つていたものが、脱出できる計画だったのだ。これは嬉しかった。一か月近くも前に要塞に入られたのは、そういう妙味のある計画だったのである。翌日から短いほうは東に五〇メートルほど、南に向けては一〇〇メートル以上のトンネルが掘りはじめられた。

要塞の二階から地階まで板梯子で降り、掘削した土は四輪トロッコではこび出し、何もない一階部分にぶちまける。地階までの梯子はトイレの横に、トイレに見えるようにカムフラージュされていた。映画「大脱走」のトンネル掘削シーンみたいな感じを想像してもらえばいい。昼夜二交代・四人二組で、ふたつのトンネル掘削が行なわれた。

要塞は二階が居住空間で、三階にはガソリン入りのドラム缶が何本も置いてあつた。発電機をつかつた電気な

壁に這わせてある電灯が一緒に落ちてしまうからだ。安物の電灯だったのかよく切れてしまった。消える前の煌々と明るくなる瞬間がはかない。どのくらいで土手に達しただろうか。五〇メートルのトンネルはすぐに掘止めとなった。完全に貫通してしまうと、警察の事前捜査で発見されてしまう。

戦闘がはじまった

鉄塔の資材が運び込まれたのは、二・二六の何日前だったかハッキリおぼえていない。要塞の下で何台ものクルマを連れ、警備している機動隊や私服刑事にむけてヘッドライトを照射しながらの搬入だった。そして三月二十五日の昼から、航空法四十九条違反の構成要件とされる鉄塔の組み立てがはじまった。

のちに起訴状で知つたことだが、二月要塞戦の採証で立ち入り捜査をしようとしたところ、火炎瓶が現認されたので取り締まりに入った、ということ

ので、ときおり蛍光灯が消えたり点いたりでグローブ球がスパークする。気化したガソリンに引火しないかとヒヤヒヤしたものだ。反対同盟の幹部（北原事務局長・石井武実行役員・秋葉哲救対部長）三氏は三階の特別室だった。二月要塞戦では内田寛一行動隊長以下、幹部たちが最先頭で闘つていたが、それは鉄骨だけのスケルトン状態だったからで、コンクリートを打つた要塞では、文字どおりたてこもるしかなかった。したがつて、反対同盟幹部の活躍はほとんどなかった。

それはそれで、何となし士気を削ぐような印象がしたものだ。その幹部たちが入つてきた頃には、トンネルはおおむね完成していった。それにしても、厳寒のなかを剥き出しの鉄塔で悲惨なたたかいを強いられた二月要塞戦にくらべると、わたしたちの三月要塞戦は恵まれていたというか、申しわけないほど「好待遇」だった。三食休憩付きの二交代勤務のうえ、バス・トイレ

になつていた。「火炎瓶を現認したので、これより取り締まりを行なう」という機動隊の指揮車からの警告は、確かに聴いた。ヘリコプターが接近していたから、おそらく火炎瓶の写真を撮つていたはずだ。ということ、警察は航空法四十九条での立件に自信を持つていなかったのであろう。ともあれ、これで警備当局には立ち入り調査・取り締まりの名分ができたのだ。

その夜、まず目隠し用に立てていた孟宗竹のバリケードが、装甲車によつて一本ずつ押し倒された。それを待つていたかのように、こつちも応戦する。武器はY字型に鉄パイプを溶接した大型パチンコから鉄筋の矢。腕に装着してつかうパチンコ、ブロック片、そして火炎瓶である。鉄筋の矢は威力がすさまじく、直進して着弾すると「ドコン！」と装甲車の防護壁が音を立てる。一瞬、装甲車が動きを止めて「おおっ、当たつた」「動かないぞ」と囁きあつ

レ付、おかずは缶詰が主流だったとはいえ、コックさんと栄養士さんも居ただけから。そしてあまり使えなかつたものの、火炎瓶用のガソリンや鉄パイプ、鉄筋弾にブロック片と武器もよりどりみどり。二月要塞が補給のないガダルカナルやインパール作戦ならば、われわれは潤沢な武器と兵糧を備えたマレー攻略部隊。ハンモックの旧型戦艦にたいして、ベッドと冷房完備の戦艦大和が「大和ホテル」と呼ばれたようなものだった。たとえが悪くて、すいません……。

トンネルの掘削は、けつこう愉しかった。三里塚の上は黒いピロッドのように細かく、いわゆる肥えた土壌である。ところが、いったん表土をくぐると、関東ローム層はやわらかい赤土だった。小ぶりの鉄だつたと思うが、サクサクと一時間お削れば五〇センチは掘り進んだような記憶がある。

ときおりバサツと落盤してヒヤリとする。ヒヤリとするのはそのたびに

たものだ。一説には、装甲車の装甲版に突き刺さつたともいう。

しかし、矢のダメージで動きを止めたわけではなかつた。装甲車の内部では「被弾しました」「異状ないか?」「ありませんッ!」などという会話があつたかどうかは知らない。そしてガス弾がパンパン飛んできた。夜空に火花のように火葉の弧を描きながら、鉄塔にコキンと当たつて落下してくる。ガス弾がロケット花火のように、自分で推進力を持つているのは初めて知つた。きな臭い嫌な匂いで、涙がでてくる。その夜は十五分ほどの戦闘で終了した。

翌三月二十六日、三里塚第一公園で全国集会が開かれる予定だ。要塞のファザードは「今ぞ起て、滅反に苦しむ百姓も 大義を樹てる春はきた」と大書きされた横断幕に包まれた。

すでに、わたしたちのたてこもる要塞の西側は、門前市をなすがごとく機動隊車両で埋め尽くされていた。集会

後はカンパニアデモじゃなくて、こつちまで攻めてきてくれよと思つたものだ。というのも、一〇〇メートルはあろうかと思われる大型クレーンが、わたしたちの眼前で組み立てられているのだ。やがて、あれが要塞からの攻撃を防御する防護板を吊るし、機動隊の接近を容易にするであろうことは想像がついた。

いっぽう、本集会に先立つ午前中に菱田小学校跡地で別の集会（三〇〇〇人）が開かれたのを、わたしたちも要塞籠城組が知るよしもなかった。

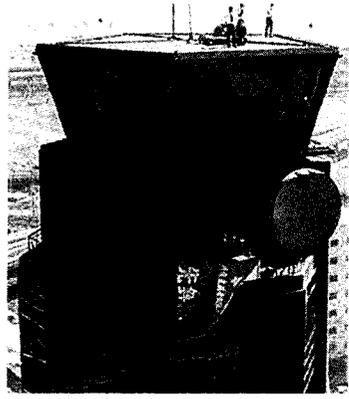
「おい、あれは俺ら（味方）なのか？」という誰かの声で、赤ヘル軍団が菱田から東峰方面に、山林のなかを進撃するの気づいたのだ。その行軍は陸続という表現がふさわしい、おりからの陽光にヘルメットの赤がまぶしかった。

つぎに「おいあそこ、いったい何をやってるんだろなあ？」という声で、管制塔の方角に目を凝らしてみた。へ

んな生き生きとしています。などと、管制塔占拠の快挙に快哉をあげる。

そのいっぽうで「九〇〇の部隊が集結」というのは、要塞からの脱出を九〇〇人で援護する準備はできているよ、という意味である。そして「南一二〇メートル」という符丁を会話のなかに差しささむ。要塞から一二〇メートル南の脱出地点を、確保してくれという意味である。

二月要塞戦のときのように、機動隊は真下まではやってこない。遠巻きにしたまま、標的のようにジュラルミン



管制塔に赤旗がひるがえる

リコプターが管制塔に近づいて、何かしているようだが、よくはわからない。そのときは、そんなことよりも眼前の戦闘、といつても一キロほど離れているはずだが、赤ヘルと機動隊の激突に目を奪われていた。飛びかう火炎瓶、鉄パイプを振るつての死闘。まさに特等席からの「観戦」だった。炎は北東からの風にあおられて、草原を舐めるようにわれわれの眼下に達した。機動隊員が盾で炎を消そうとするが、もはや燃えるにまかせろしかない。

「おいッ、く、空港のなかで、炎があがつているぞ！」

「空港が、燃えている！」

それは本当だった。黒煙がもうもうと上がり、破られた第九ゲートの向こうで空港が燃えている。五ゲート方面でもデモ隊がフェンスに肉迫し、火炎瓶が投げられている。われわれ籠城組は、見ていただけのもどかしさを感じたものだ。わたしたちが、主役のはずだったのに――。

の桶を構えているばかりだ。それをめがけて鉄筋の矢を放つが、羽根が付いていないので横すべりしてしまう。たとえば弾丸がまっすぐ飛ぶ原理は、砲身に刻まれたライフレリング（螺旋状の切れ込み）が弾を回転させるからだ。ただ単にゴムの伸縮エネルギーで飛んでいく鉄筋の矢は、行き先は風に訊いてくれという感じなのだ。

いっぽう、ガス銃は花火のように噴出する火薬を推力にしている。この日はガス弾の催涙剤が飛散しないように、わたしたちは屋上に水を張っていた。水のなかで「ボン」と破裂して、きつい催涙剤を吐き出すガス弾を外につまみ出す。この催涙剤は下着のゴムにたまって、あとでそこが火傷したようになつていった。

投石はブロックを砕いたもので、中に空気が入っているものだから威力は小さい。要塞の十数メートルの要塞の上から投げるわけだから、オーバーフローではあまり距離が出ない。サイド

やがて、激突で逮捕された学生たちが、野っぱらを連行されてくるのが見えた。わたしたちが事態を知つたのは二階に降りてからだ。ラジオの臨時ニュースは管制塔が占拠されたことを報じていた。「あれつて、管制官を吊り上げてたんだな」と、ようやく管制塔の異様な風景に得心したのだった。のちに「管制塔に赤旗がひるがえつた」と呼ばれる日のことである。

その夜、わたしたちを包囲している機動隊が部分的に撤収した。「おい、機動隊が帰っていくぞ」「ホントだ！」それが全軍であれば、われわれは機動隊を退却させたことになるわけだが、そうではなかった。

もしも、要塞から脱出していたら

三月二十七日の朝は、無線でのやり取りで始まった。

「要塞のみなさんに、各紙の一面記事を見せたいものです」「九〇〇の部隊が横堀合宿所に集結しています。み

スローで高く投げることで、遠巻きにしている機動隊員の近くに「着弾」したものだ。火炎瓶はもう、まったく足元にも届かない距離だった。

夕刻には本格的な戦闘になつた。前の近くでガス弾が破裂したので、わたしはいったん三階の風呂場に行つて水で流してもらつた。なぜか発電機が止まつていて、換気扇が使えないから二階あたりまで催涙ガスがしのび込んでいた。昼過ぎのことだったか、突然真顔になつて「外に出て、重機を壊してくる！」と言いだした人がいた。あれは軽いパニック障害だと思う。巨大な重機の存在が、わたしたちの精神的な圧力になつていた。要塞の一階はトンネルから掘り出した土で埋まっているから、もうトンネルがいには出られないのに。

やがて赤く染まった夕陽が地平線ちかくに落ちたはじめたころ、ブルドーザーが整地をはじめた。まもなく重機が前進してくるはずだ。ブルドーザー



放水とガス弾の攻撃にさらされる要塞 (3月27日)

の運転手をめがけて鉄筋弾を飛ばしては、機動隊からガス弾の猛攻をうける。すぐそばの杉の木に引つかかったガス弾の炎が葉にうつり、何かを歌うように燃えているのが見えた。機動隊が三名殉職した七〇年九・一六東峰十字路戦闘のとき、わたしの大学の先輩は激闘のさなかに、赤い花が風にそよいでいるのを見たという。それを見せたのは、ひとの心にやどる平穩への希望なのではないか。

そしていよいよ、本格的な放水がはじまった。要塞の縁には工用の鉄パイプを立てて、ベニア板を縛り付けてあったから、そこで放水が跳ねる。水しぶきで何も見えなくなつたとき、クレーンがいきなりガンと下りてきた。組み立てられた大型クレーンではなく、ユンボのクレーンだった。左右にうごいて、鉄パイプをなぎ払う。直系五センチ以上の鉄パイプが、飴のように折れ曲がるのには驚いた。クレーンに火焰瓶を投げつけては、放水がそれを消

す。割つた火焰瓶に火を点けて、機動隊員が乗り込んでくるのに備える。しかし、どうやって乗り込んでくるつもりだ。

その答えはまもなく、おどろくべき現実の光景となった。大型クレーンの先に垂らしてあつた一〇メートル四方の防護網が、要塞の上に水平に倒されたのだ。そのときは気づかなかつたが、下敷きになってしまった仲間もいた。その仲間たちは機動隊員に腕をねじ上げられて、鉄塔に登つた仲間の攻撃の楯にされ、生涯忘れられない屈辱を味わつたと証言したものだ。彼らがとり残されたのも理由がある、攻撃ばかりが先立つて、わたしたちには撤収の意思一致ができていなかつたのだ。攻撃精神ばかり強調する、まるで旧日本軍みたいなものだった。

いまも元被告団の飲み会で「三・二六で管制塔を破壊したあとに、なぜわれわれは脱出しなかつたのか」という議論になる。管制塔が占拠された夜、

横掘要塞を包囲していた機動隊は一時的にだが、大挙して撤退していたのだ。おそらく政府高官や官僚が事件後の視察に來たので、空港内の警備状態をみせるために、一時撤退したのではないだろうか。

われわれのトンネルからの撤収はしかし、最後の段階まで持ち越された。撤退は議論にすらならなかつたのである。議論にすらできなかつたのは、管制塔占拠・空港突入が赤ヘル三派(第四インター日本支部・プロ青同Ⅱ共産主義労働者党・共産同戦旗派主流派)だつたので、中核派(四名)はぜつたに要塞からの撤退に反対するだろうと思われたからだろう。撤退を提案した瞬間に「敵前逃亡するののか」という議論は必至である。

ここで逮捕者を出さなければ、中核派は開港阻止闘争でまるつきり何もしなかつたことになるからだ。事実、彼らは機動隊が屋上に突入するや、鉄塔に登つて抗戦した(第四インターも一

名が鉄塔に残つた)。撤退のイニシアチブを、反対同盟三幹部も取ろうとはしなかつた。管制塔を破壊して開港阻止闘争に勝つたのだから、もう逃げも隠れもしまいという空気があつたのも確かだ。

いまこうして闘争記を書けるのも、あのとき逮捕されたからだと考えると、撤退の議論は懐旧をみたく酒の肴なのかもしれないと思う。開港阻止決戦から四〇年集会での柳川秀夫さん(反対同盟代表)の言葉ではないが「みなさんも人生が変わつてしまつたかもしれないが、それなりに納得している」のである。われわれは三里塚闘争で逮捕され英雄(一部の社会運動だけでの英雄ですが)になつたことに、ここから納得しているのだから。

トンネルの中での酸欠

ふたたび、戦場からのレポートである。

「全員、地下二階までおりろ！」とい

う指揮者の声で、わたしたちは階下に殺到した。中核派と第四インターの五人が鉄塔に登っていくのを見た。その五人のうち二人が洋弓を持っていて、殺人未遂が罪名に加わることになるが、さいわいにも執行猶予付きの判決だった。

わたしのほうは、残念ながら火災瓶は何本も投げられなかったが、ガス弾を避けるのに必死で、それなりにからだが動いていたのだろう。地下トンネルに入ったときは、もうこれで逮捕されてもいいやという気分になっていた。たまたまっていた疲れからか、ラグビーの試合を終わったような爽快感。じつさいには、脱出は困難だろうと誰もが思っていた。

山狩りで発見された感触はなかったものの、トンネルがどこまで達しているのか、はなはだ不安なのである。私たちは東側の短いトンネルに向かい、大所帯の第四インターが南の長いトンネルに向かった。

と問われたのを覚えている。最初の脱出失敗が八時ごろだとして、最終的に逮捕されたのは翌日(午前一時ごろ)になっていたので、七時間ちかくも土と格闘していたことになる。鉄塔に登ったグループも逮捕されたあとだった。千葉刑務所内の拘置所に連行された翌朝は、まぶしいほどの陽光のなかに桜が満開だった。数日後、わたしは二十一歳の誕生日をむかえた。

国民の四人に一人が 空港建設に反対

まるで天下泰平の日本に、突如として現出した戦争のような開港阻止闘争は、あまねく国民に三里塚空港の問題点を伝えた。議会は実力による開港阻止を批判し、ほぼ全会一致で暴力的反対運動を退けるために、成田治安立法を決議した(青島幸男議員が反対)。暴対法をさかのぼること十五年前に、われわれは「建物の使用禁止命令」を

「出られそうか?」「出られるさ」

全身をつかって土を掻き、残土を後方におくる。ほんとうに全身をつかって、土の中を泳ぐような感じだった。全力で掻き出し、疲れがみえる前に交代する。このときのことを、相被告になる女性活動家は「あんなに、みんなで頑張ったのに」と述懐していたものだ。やがて風が入ってきた。先頭のひとりが出ようとしたとき、機動隊の声がした。

「いたぞ!」「出てこい」 脱出戦術は読まれていたのだ。

しかし指揮系統の乱れか不徹底か、すぐに踏み込んで来ない。そればかりか、トンネルの前で「逃げられた」と茫然としている機動隊員の姿が夕刊の記事になっていたのを、わたしたちはのちに知った。

その後、わたしたちは南側の長いトンネルに向かった。そこにはインターの部隊二〇人ほどが、まだ疲れた表情でいるのだった。やはりトンネルは土

ともなう特別法を引き出してしまったことになる。いつぼうでマスコミのアンケートによると、国民の四分の一が農地を空港にすることに反対だった。これは意外だった。

問答無用の土地収用、農業と共同体の破壊につながる空港が本場に必要なのか、国民的な議論が沸き起こったのだ。コンクリートを剥がして、緑の大地にもどせという意見もあった。いつぼうでは「火炎瓶を投げってくるゲリラは、機関銃で射殺してしまえ」(浜田幸一)という政治家の声も少なくなかった。こつちも血が騒いでいたが、向こうも暴論が飛び出すほど興奮していたのだ。空港問題を国民に知らしめただけで、三・二六闘争の意義は大きかったといえよう。これが後年、円卓会議から政府の「謝罪」という流れにつながる。一時の方便とはいえ相手が「謝罪」したのだから、形のうえで反対闘争は勝利だったのだと思う。

戦前・戦後をつうじて、反政府の

手まで達していなかったのだ。トンネルの先頭では、交代で掘削が続けられている。やがてわたしたちを襲ったのは、酸欠という恐怖だった。

「はあはあ」と激しく息を吸わないと、呼吸ができない。

秋葉哲さん(反対同盟救援対策部長)の「もういいから、上に向かって掘りなさい。空気を入れなさい」という指示で、スコップを上に向けた。すぐに穴が開いて、ちょうど機動隊の靴が見えた。歩く靴音が感じられる。外からは「空港粉砕」のコールが聴こえる。相手はまだ気づいていないが、スコップの先を突き上げた。

上から「反対(反対同盟の警察用語)か?」と誰何された。引き上げられて、顔を鉄甲でかくく一発。わたしは父親ほどの年配の機動隊員(専門職ではなく、地方から動員された管区機動隊)に軽く、手の甲(鉄製の防具)で一発殴られたあと逮捕された。

その機動隊員に「だいじょうぶか?」

大衆運動がまがりなりにも警察権力に勝った、初めての闘争でもあった。岸内閣を倒した伝説的に名高い六〇年安保闘争も、警備当局を驚嘆させた一〇・八羽田闘争(佐藤ベトナム訪問阻止)も、日大・東大闘争をはじめとする諸大学の全共闘運動も、「具体的な勝利」の地平を切りひらいたものではない。その意味では、三・二六は六〇年代・七〇年代闘争のうっ憤を晴らす快挙だった。それでは、革命運動にとつて三里塚闘争とは何だったのだろうか? 農民の戦闘性に引張られて先鋭化した実力闘争だけではない。そこには、労農同盟や農業農民問題というテーマがあった。

資本主義における 農業・農民問題とは?

あの頃のわたしたちは、社会主義論の立場から農業の集団化というテーマを問題意識にしていた。戦争反対や政策反対闘争の延長に革命を描定するの

ではなく、運動そのものが社会主義の要求を内包するものとして提起するべきだと。革命運動は社会主義社会の萌芽なのであると。

そこで単なる空港反対運動ではなく、農民を社会主義に動員する萌芽があるはずだと考えていたのだ。当時はオルタナティブ（政策選択）という言葉が流行していたが、あえて社会主義革命の準備という表現に、わたしたちは執着した。これは関西ブントと合流したゆえの党派性であろうか。当時、わたしが属した情党派（共産同再建委員会）の流れを汲む組織は、赤軍派の一派と合流していた。

農業農民問題の一般的な定義をしておこう。マルクスの時代、農民は共同体を通じて自然の力（天変地異）に抗することができず、神や絶対的な権力（君主）に頼らざるを得ない（『レイ・ボナルトのブリューム18日』）。したがって、没落するか体制に組み込まれる存在だと考えられていた。もつと

三里塚の運動が生協をはじめとして全国に広がっているから、流通も全国に拡大できる。じつさいに、わたしは藤本敏夫さん（加藤登紀子さんのお連れ合い）の「大地を守る会」でアルバイトをしていたので、三里塚の野菜（根菜類が多かった）の需要は実感していた。それでもちに、同じ東峰部落の堀越さんが野菜を団地などで直販したように、朝採り野菜の美味さは格段に上だったと思う。ぎやくに言えば、三里塚の野菜は「三里塚闘争」というだけで、ありがたがられる存在だったのだ。

有機農法については、かなり早い段階で取り入れられていた。冬場の援農で「堆肥を取ってきてくれ」と言われ、山積みになっていく乾燥堆肥の温度におどろいたことがある。見えない微生物が繁殖して、そこだけ熱を持っているのだ。寒風吹きすさぶ真冬なのに、そこだけが熱い。農学部の子生たちも「無農薬・有機農法（微生物農法）」

もマルクスは、本誌二〇一六年夏号「岩佐茂インタビュー」のとおり、穀物肥料論者・リービヒの研究への関心がしめすごとく、農業問題において人間と自然の代謝関係を研究している。生態史観である。ロシア革命の黎明期にベラ・ザストリツチ（ナロードニキ・メシエビキの女性革命家）に宛てた手紙では、ロシアのミール（農村共同体）の革命的な可能性を予言している。これはマルクス最晩年、流行の女性革命家への思慕がなされたものではないか、とわたしは思っているが。

いっぽう、帝国主義段階の資本主義の下では、農産物は国際競争の中で商品として安価な地域に淘汰される。したがって農業は大工業化されるしかないで、農民の大半はかならず零落する。これが現代の農業・農民問題である。そこから土地の共同所有・全人民的所有によって、農業の集団化が計られることで、農民は零落することなく生産性を上げることができる。と、

に興味を持っていて、それを見るために三里塚闘争に参加するケースがみられた。

三里塚闘争に農業農民問題としての側面が厳然たるかたちで浮上したのは、八〇年代なかばの成田用水問題だった。成田用水は高地（北総台地）である三里塚に、はやくから計画されていた。それが土壌整備（深田の底上げ）などと一体化して、空港建設の見返り事業として立ちあらわれてきたのである。支援党派の多くは、これを空港建設の一部と見なして反対した。用水建設反対運動も実力闘争となったが、これがのちに反対同盟の分裂にいたるひとつの契機だった。

常東農民運動で名高い山口武秀さんの言うところを、伝聞だが記しておく。共産党も新左翼も、農民運動としての三里塚闘争を政治闘争にしてきた。政治的に利用してきた、というニュアンスである。農業基盤整備を行わない農民運動は、営農とかけ離れたところ

レーニンおよびロシア社会民主党（ボ）を継承したコミンテルンは問題意識を持った。

したがって農民は、労働者階級と連帯して社会主義に向かうべきである。そうしなければ、零落する小ブルジョアジーとなるしかないのだと。かなり教条的だが、新左翼の大半はこう考えていたはずだ。じつさいには、ソ連邦のゴルフオーズ・ソフォーズ（国营農場と集団農場）は農民の営農意欲を刺激できず、資本主義的な工業化すらできなかつた。

三里塚における農業の集団化は、東峰部落で行なわれたワンバック、共同出荷場の作業にその具体性があると思つた。そこで現地集会の前夜には青年行動隊を呼んで、農業の集団化について討論会を持つたことがある。「どうせ闘うのなら、農業もいろんな方法でやってみつて。いろんなことを試してみる。そういう問題意識だな」と語ってくれたものだ。

で闘っていることになるのではないか。そういう意見だつたと思う。さすがに的確な指摘である。

獄中・裁判闘争

逮捕は二回目（最初は学館闘争）だったので、三日目には身元が割れた。すぐに父親が面会に来て、不安そうに言つたものだ。「国に逆らつても勝てるわけがない。大変なことになるぞ」と。そこまで父親と政治討論をしたことはなかったが、とりあえず逮捕は想定内で、まあ何とかなると返したものだ。国家よりも、あなたの息子を信じなさい、と。

終戦時に予科練・特攻隊崩れ世代の父親でも、息子の一大事におどろく様子には「心配すんな、半年で出られる」と言うしかない。その後、大学が先輩の担当検事が「息子さんのことは、わたしに任せなさい」と言つたのに、わが父親は「反感」を抱いたらしい。そこから、かえつてわたしの行動に理解

をしめしたと、これは母親から聞いたものだ。わたしたち父と子は理解し合えないまま、通じ合う感情で行動したことになる。

それはともかく、横堀要塞の抜け穴トンネルは、警備陣に気づかれていた場所までは特定できなかったものの、その存在は推定されていたのだ。ところが検察官は裁判において、抜け穴トンネルから脱出した者がいなかったことを、立証しないというドジを踏んでいる。

公判廷で二人目の裁判長（刑事事件は嫌いだと公言する、民事畑のやさしい人でした）は被告人質問で「あなたがたは要塞に残ったけれども、外に脱出した人もいたのでしょうか？」と丁寧にも言ってくれたのだ。わたしたちは運わるく脱出できなかったのではないかと――。

対するに検察官は、わたしたちのほかに誰も脱出した者はいなかった、との立証を詰めない甘さに気づいてもい

なかった。つまり裁判長のわたしたちへの同情の念を払しょくしないまま、論告求刑を終えたのである。

抜け穴トンネルが予期されていたのは、交通課の刑事たちのレベルでも「過去の例（第一次・第二次強制取用阻止闘争）をみれば、すぐにわかるじゃないか」「あそこから、外に出た者はいないんだ。君たちが『自分たちは逃げなかったが、ほかに逃げた者がいる』とか言っても通用しないぞ」と事態は判明していたのに、検事はあえてトンネルからの脱出の有無を立証しなかった。

ぎやくに言うると、警察と検察の連携のなさは明らかだった。そして「逃げられなかったのは、指導者が悪いからだぞ」（取り調べの刑事）というのは半分は当たっているが、半分は「前日に脱出しなかった」のは前述し他っており、党派間の政治の問題なのである。懲役を体験したわけではないが、獄中闘争もレポートしておこう。

建物は明治時代のもので、古色蒼然とした赤レンガ造りだ。独房の扉はぶ厚い一枚板で、トイレは肥溜め式。唯一の救いは、頑丈なレンガとコンクリートなので、夏の熱さがそれほど感じられなかったことだろうか。冬も寒いとは感じなかった。いま、東京拘留所は建物全体に冷房があり、個室にもその冷気がくるので夏も快適だという。密閉性が高いので、冬も寒くないという。いずれにしても、堅牢に造られた建物は夏も冬も、そこそこに快適だということかもしれない。

拘禁されているのだから、それが苦痛と思えばキリがないけれども、措置所のおかげで二十一歳になったわたしは、シヤバでは意識しなかった向学心で、それなりに充実した「獄中生活」を送ったと思う。時間をかけて資本論を読むのは初めてだった。「相対的価値形態と等価形態は相互に従属し制約し合う二要素であると同時に、相互に排斥する両極であり、換言すれば同一なる価

値表象の両極である」という価値形態

論のフレーズをいま読んで、何のことかさっぱり理解できないが、若いわたしは解かったような気になっていた。小説もよく読んだ。ドストエフスキーに植谷雄高、高橋和巳の小説は「こんなの、獄中で読まないほうがいいよ」と差し入れ担当の仲間が言っていた『憂鬱なる党派』もふくめて、ほとんど読破した。やはり『悲の器』と『邪宗門』がダントツにおもしろく、そしてテーマがズーンと重たい。『悲の器』が文化人論・恋愛論・法と国家論を詰めたんだ重厚な問題作なら、『邪宗門』は宗門の悲劇を通じて描いた壮大な現代史であろう。何度も読み返せる小説作品としては、三島由紀夫の『豊饒の海』四部作とともに、わたしはこの二作品を挙げたい。

未決の「倉房雑役夫」は既決の模範囚が行なうのだが、その中に高橋和巳を読んでくれる人がいて、本（領置品）の出し入れのさいに話になった。「高

いまの刑務所では、テレビも観られるのだという。ヤクザの取材で知ったことだが、時間と選局は決められているものの、かなり自由に観られるそうだ。時間は所によって違い、十八時から二十一時、十九時から二十一時だという。

わたしが入っていた頃の千葉拘留所（千葉刑務所内）は、十八時からラジオ放送が始まり、二十一時に消灯。その後、二十二時か二十三時までラジオが聴けたと記憶する。昼は十二時から十三時だったか、休日（刑務所的には免業日）は終日聴けたと思う。いま、北海道の旭川刑務所の独房が評判で、まるでワンルームマンションだと言われている。旭川刑務所はLB級、つまりロング（長期刑）で再犯（B分類）の重刑犯の刑務所である。千葉刑務所もLB級で、わたしが入っていた頃は狭山事件の石川一雄さんが居たところだ。面会室の待合ボックスで、石川さんと隣り合わせになったことがある。

橋和巳はおもしろいよな。ちよつと硬いけどな」と、彼はかなりのインテリで、ドストエフスキーの話もした記憶がある。のちにヤクザの取材をするこゝとで、ヤクザにとって「刑務所は大学」だということだった。担当さん（看守Ⅱ刑務官）を「先生」と呼ばされ、イヤでも本を読むしかないのだから――。

刑務所の食事をネットで検索すると、いまも獄メシは麦六割・白米四割の健康食らしい。それが美味いかどうかはお正月に出る白米一〇〇パーセントを食べてみればわかる。白米（銀シャリ）はまるで、上質なもち米を味わうかのごとき美味さで、麦飯の不味さを実感させたものだ。カレーとモツ煮込みがわたしには極メシの御馳走で、たまに薄いトンカツが出る狂喜乱舞であった。このトンカツ定食が夜に出るのは、決まって死刑相当の被告が千葉刑に滞在する時だった。

というのも、某党派の長期刑相当

の被告は、東京地裁と千葉地裁に被告事件を抱えていたから、たまに千葉刑に移送されてきたのだと思われる。彼が来る日はトンカツなのだ。そして公判日もトンカツだった。なぜトンカツなのかといえば、これは新聞でも暴露されたことだが、千葉刑務所は刑務官たちがコッソリと養豚をしていたのだ。もちろん自分たちで餌をやるわけではなく、懲役囚に育てさせていたのである。

刑務所はいわば工場であり、キャビックという組織を通じて製品を一般に販売している。懲役囚にわずかな報奨金を与えて、木工工場からは筆筒やテーブル、印刷工場ではチラシや文庫本の印刷、金属工場ではネジや釘といった部品類、そして独房では封筒・紙細工など、シャバでは主婦の内職みたいなものが行なわれている。たまにデパートで刑務所作業販売会という催しが行なわれることがある。販売されているのは木工製品が主流で、それは

それは職人が造ったとしか思えない逸品ばかりが並んでいるものだ。

トンカツも楽しみだった。自弁でお菓子は買える。獄中にいると不安がつり、ついつい食べすぎになる。白アンパンが好物なので、毎日一個は食べていたような気がする。甘い物は注文できるのだが、ポテトチップスとかジャンクフードは少なかつたように思う。それにしても、一日十五分の運動では食べた量を消費できるはずもなく、逮捕された時に五〇キロほどだったわたしの体重は、一年間で六十三キロまで増えていた。これは懲役囚でも同じらしく、みなさんふつらくらとして

裁判は体験するべき

冒頭意見陳述は、初めて書く本格的な論文となった。わたしは学部は文学部で現代文学（卒論は武田泰淳の「史記」）だったし、どちらかといえば感性的に運動に参加したほうである。未

決の獄中一年のあいだに、刑事訴訟法や資本論の読書、ドストエフスキー、高橋和巳を読破したことはすでに書いた。

未決拘留の卒論ともいえるべき冒頭意見陳述は、京大教授佐藤進さんの『科学技術とは何か』（三一書房）をもとにした、今でいえばポストモダンのな資本制の近代合理主義批判だった。高度な資本主義のもとでは、すべてが数量化されるがゆえに、三里塚のような開拓農の苦勞が個別には理解されない。そこに農民たちの政府への不信が組織されたのだ。思い起こせば、獄中の一年ほど勉強した時期はなかつた。

初公判のうちに冒頭意見陳述を終えて、はじめて保釈がみとめられた。そこまで保釈却下が二回、二月要塞組が半年で保釈になったのにくらべて、わたしたちは倍の拘留期間となったわけだ。保釈後は足りない単位を取るために、まじめに大学の授業に出席した。獄中でおぼえた勉強の方法が選ばせて、

共産主義運動の歴史やマル経の経済学原論、訴訟法などに向かわせたものだ。三里塚闘争の「英雄」ということで、対立していた党派からも一目置かれ、若い学生活動家から敬意を表されたのは愉しかった。反戦運動を基調とする左翼も、なぜか兵役主義なのである。

四年間の裁判闘争をへて、判決が出たのは八三年の三月である。おりしも三里塚芝山連合反対同盟の分裂が明白になり、論告求刑の日（二月公判）はマスコミのフラッシュカメラの放列を浴びたものだ。判決の当日は、傍聴券をめぐって北原派の支援と熱田派の支援が睨み合う事態となつて、わたしたち被告団もなかなか裁判所に入れない有り様だった。フェンスを挟んで殴りあいも起きていた。それに公安刑事が介入しようとする。逮捕者こそ出なかつたが、やはり内ゲバは良くないのだと、この歳になつて思う。内ゲバ問題については、また別個に論考を起す

ことにしたい。

判決は懲役三年六ヵ月、執行猶予四年だった。判決時の裁判長は民事畑の人で、訴訟指揮はきわめて温厚、反対同盟の三幹部に対する気遣いも素晴らしかった。「秋葉さんの畑は、やはり園芸農業なのですか？」と、秋葉哲救援対策部長が最終陳述を終えたあとに語りかけていた記憶がある。それでも判決を言い渡すときは、かなり緊張した語調になつていた。それを考えても、いい人だったんだと思う。

最初の裁判長は荒木さんといったが、なかなかロマンズグレイの見栄えがする方で、わたしは嫌いではなかつた。訴訟指揮は弁護側に対しても、検察側に対しても厳しかった。わりと実直なところがあるわたしは、北九州への帰郷のさいに旅行許可を律義に申請しては「右、これを許可する」という荒木裁判長の直筆をいただいたものだ。ロウヤー（法律家）というのは、若い学生にとつてすこぶるカッコいい存在

だった。四回生から裁判と法律に接したことになるが、他学部聴講ではいくつか法学部の選択科目を選んだものだ。被告団の弁護人では公判闘争を全面的にささえ、若いわたしたちを指導してくれた鳥羽田宗久弁護士（故人）に感謝したい。弁護士の前先輩たちを調整しつつ、なお、わたしたちに親身になつてくれた。鳥羽田先生、本当にありがとうございました（謝）。

法律に親しむのは、いいことです。後年、アパートの敷金問題（敷金の没収と多額な修繕金の請求に対して、内容証明を出し敷金を奪還）、あるいは出版社の契約不履行事件で本人訴訟をした時、ぎやくに自分が関係する出版社が被告になつた裁判でも、訴訟法の知識は大いに役立った。大学進学の時、母親から「法学部がいちばんツブシが利く」と言われたのは、こういうことだったのかと思つたものだ。したがつて出身学部を訊ねられると、文学部法律学科刑事訴訟法専攻と答えるこ

ともある。あるいは文学部経済学科マルクス主義経済学専攻とか。

死刑廃止運動の関係で弁護士士の知己が多く、いまでも何かと相談を受けることで、わたしは法律的な知識に恵まれている。これは悪いことではない。各種の法律および判例には、人類の叡智が詰まっているのだと思う。

もうひとつ、獄中闘争というものが人の感性を過敏にさせるものだった。新聞紙面の悲惨な事件を読んでは、まるで被害者のように痛みを感じる。連合赤軍の植垣康博さんが自動車事故の悲惨さから、自動車社会を批判する論考を書いているのを、わたしは獄中の感性だと思った。あの豪放磊落な植垣氏をして、繊細な感性にしてしまう獄中生活。

そして被告となることは、組織の仲間に責任をせまる感情をもたらずの。簡単に言えば「わたしは逮捕されたのに、あなたたちは何をやるの？ わたしの行動に、同じ責任をとらないの

れた、七〇年代の青春――。

そんな中で唯一、組織として「内ゲバ主義反対」を掲げた第四インターが開港阻止闘争を主導したところに、あの戦いの希望があった。

第四インター日本支部の栄光と挫折

開港阻止闘争で全国にその名を知らしめたのは、第四インター日本支部（日本革命的共産主義者同盟）である。管制塔占拠にさいしても「管制官には危害を加えない」という方針が確認されていたことから、非暴力直接行動であるとの評価も浮上した。もつとも、これはベトナム反戦運動のころに起きた、ベトナム戦争反対行動委員会の日特金属工業（米軍や自衛隊に機関銃を供給）への抗議行動（機械などを破壊）になぞらえて評価されたものだと思う。開港阻止闘争では機動隊に火炎瓶を投げつけたし、鉄パイプを機動隊員

か？ということになる。組織内が「共産主義であるべき」なのに、なぜあなたは逮捕されないのか、と。それは連合赤軍の指導部がせまる、総括の要求によく似ているが、実力闘争や武装闘争が逮捕を前提にしているのならば、ごくあたり前に噴出する矛盾であろう。じつさいに、わたしを「徴兵」した指導部は、逮捕歴のない人たちだった。環境問題と健康が第一、と思う今では、肉体派という呼称をよるこんで受け容れるが、たとえば指導部は理論派で、被指導部は肉体派で構成される。もつといえ、他大学（東大・早稲田）から来ている党派の指導部が、現場（わたしの場合明大）の活動家を統制・指導する。そんな組織は当時、どこにでもあった。選挙を経ない「民主主義以上のあるもの」（レーニン）によって運営される組織の、なんと固定的で閉鎖的、そして不公平であることか。

当時、ブント系と社青同解放派において、革共同に追いつくための組織に打ち下ろしてもいる。だが、内ゲバ主義に反対するという組織路線が、革共同内派の内ゲバ戦争に辟易していた人々には、清廉なものに見えたはずである。左派労働運動のご意見番的な存在である長崎造船労組は「いま、君たち（第四インター）は好感をもって労働者たちに受け入れられている」と評したものだ。当時、第四インターの実働部隊である青年学生共闘は逮捕された二〇〇人ほどをふくめて、六〇〇ほどだったか。政治集会で一〇〇〇人ぐらいいはなかつただろうか。

当時、中核派が一五〇〇人ほど、社青同解放派が六〇〇〇七〇〇、ブント系では戦旗（荒派）が一五〇、戦旗（西田派）が一〇〇、ほかに大きなところでは立志社（のちにMPDから大衆党）が一三〇、第四インターとともに管制塔占拠になったプロ青同（共労党）は八〇ほどにすぎなかったが、こは屈強な活動家ばかりだった。わたしがいたグループはいえ、七〇人

織思想や中央集権制が模索されていた。だが、そうではなかったはずだ。革共同に倣うのならば、中核派か革マル派に入れればよかったではないか。パルタイを拒否したブント、ロシア革命における労働者反対派を標榜し、評議会運動に展望をひらいた解放派においてこそ、上位下達のレーニン・スターリン的な組織は峻拒されるべきだったのだと思う。

新左翼運動の没落はおそらく、旧左翼とおなじ組織体質を再生産したからであろうとわたしは思う。パルタイの五〇年代分裂の悲惨さを、高橋和巳は「内ゲバの論理は超えられるか」で語っている。全共闘運動の自由な組織観のなかに、高橋は旧左翼をこえる感性を見ていたが、それは七〇年代の新左翼運動に生かされはしなかった。組織はいかかわらず、個人の上に倣岸なありようで君臨していた。そして組織は組織の防衛のために、平気で人に人を殺させる。たえまない内ゲバの血にまみ

もいたのだろうか。三里塚闘争全体では、警察発表で九〇〇〇人、主催者（反対同盟）発表で二〇〇〇〇人と言われていた時代である。いずれにしても、史上初めて学生と労働者が警察に勝つたということで、第四インターはいわゆる人民大衆に期待された。

まるで六〇年代の三派全学連（第四インターも三派全学連には参加している）の再来のように、これらの人気は高まった。が、思わぬことからその栄光の赤旗（鎌トンカチ）は、地に墮ちることになったのだ。それはレイプという女性差別が、ほかならぬ三里塚現地闘争団の内部に起きていたのである。

最近、当時の女性活動家から当時のことを聞く機会があった。レイプ事件そのものは、調べてみれば他党派もふくめて芋づる式に露見したという。わたしのいたグループでもレイプこそなかったものの、就寝中に女性の身体を触るなどの行為はあった。その問題に

ついでには「女性の政治的決起を抑圧するもの」と指導部から評価が説明されたかと思う。痴漢、あるいはセクハラ行為なのに、左翼はへんな理屈をこねるものだと思つた記憶がある。ちなみに第四インターでは、女性が嫌がる性的接触をすべてレイプと規定したという。

わたしが話を訊いた元第四インターの女性も、「レイプ問題も、マルクス主義から説明しなければならぬ女性指導部に、ちよつと厭された」「女性が嫌なことをされたわけだから、そこを具体的に問題にしなければ解決しないのに」と語っていたが、そのいつばうで当時は解放感にあふれた雰囲気、三里塚の地はずばらしく楽しかったとも言ふ。若い男女が狭い小屋で寝泊まりしているのだから、問題が起きないほうがおかしいと思う。とはいえず、女性が嫌がることをしていたのだから、徹底して指弾されてしかるべきである。かく言うわたしも、初めて街頭デモで



在りし日の染谷かつさん〔「草取り草紙」より〕

密集のスクラムをしたとき、女性活動家と身体を密着させることにアソコが驚いた。左翼つてすごい、と思つたものだ。

ともあれ、この事件(複数)によつて第四インターは組織的な混乱に陥つた。レイプを糾弾する女性グループが形成され、のちに分派して第四インター国際書記局から正統派と認められる(正確には組織としてではなく、こ

のグループのメンバーを国際書記局が受け容れた)。

女性差別と言えば、六〇年代末の全共闘運動のバリケードのなかで、レイプ事件や女性が嫌がる事件は頻発していたという。上野千鶴子は男子活動家から「共同便所」という言葉が出たのがショックだったと、その当時を語っている(朝日新聞の連載記事)。いわば全共闘運動における女性差別こそ、レイプ(フェミニズム)が生まれ出る契機だったのだ。

反対同盟の人びと

反対同盟の人々についても、印象を記しておこう。東峰部落の石井武さんは、わたしたちの団結小屋の庇護者であるとともに、横堀要塞戦ではわたしの相被告だった。石井という名前は三里塚・芝山地区には多い名前前で「731部隊」は石井部隊とも呼ばれていた。石井武さんは731部隊ではなかったが、満州で活躍した関東軍の陸軍将校

である。「おれは匪賊を何人××したか知れない」が酒を飲んでの口ぐせだった。元将校だけに、戦略的な視点や戦術的な判断は卓抜だった。元軍人たちが闘争を仕切っていたのだから勝てる戦いだつたはずだ。

三里塚闘争の軍師といえば、岩沢吉井さんをおいて他にない。ほかならぬ三・二六管制塔占拠の作戦立案は、この人が空港建設説明会の混乱のさいに公団事務所から手に入れていた図面がもとになっている。それは地下水道の精緻な見取り図であり、空港の地下構造の全容である。空港を裸にしたよ

うなものだつたという。この山林の向こうを掘れば、空港中枢に通じるマンホールがあるはずだ、という感じだつたらしい(映画「三里塚のイカロス」)。三・二六の開港阻止のときに菅沢さんが詠んだ歌をあげておこう。

怒り秘め 待ちて十二の 歳月を
思ひかなえて 涙流るる

この稿で何度か名前を出した秋葉哲さんは、見た目そのまま鷹揚な雰囲気がある柄をあらわしていた。同じく相被告の北原鉦治さん(事務局長・のちに北原派代表)は紳士然とした風貌とは別の面を持つていたが、困難な局面を

闘争継続のために尽力された。染谷かつさんも、わたしたちの団結小屋の庇護者だった。「闘争宣言」の大木よねさんの親友で、東峰部落の開拓農である。その素顔は福田克彦さんの「草と草紙」(ドキュメンタリー映画)に詳しい。

おわりに

三里塚闘争は土地所有をめぐる農民闘争だったのか、それとも住民の空港反対運動だったのか。社会運動の観点からはそんな命題が残された。実態は農民が主体の住民運動であつて、土地

改訂版

登紀子1968を語る

【加藤登紀子著】68年革命とそれが残したテーマ、反戦運動と環境保護、農的生活について、加藤登紀子が熱い思いを語った40時間。全共闘運動から50年のいまこそ読み返す。上野千鶴子とのバチバチ対論収録。

800円+税

世界書院

〒136-0071
東京都江東区亀戸8-25-12
電話：03-5875-4116